

## 離島振興法の原点とその目標\* —竹下虎之助元広島県知事に聞く—

鈴木 勇 次\*\*

The course of the down of the Remote Island Development Act

—Listen to some time President of Hiroshima pref—

Yuji Suzuki

### 研究ノート

#### 離島振興法誕生の経緯 —竹下虎之助元広島県知事に聞く—

##### まえがき

わが国の戦後の地域振興政策の嚆矢ともいうべき離島振興法は、昭和28年3月突然の衆議院解散により審議未了となったものの、その後の第16国会において議員提案により上程され、昭和28年7月15日参議院で満場一致を以て可決され、同月22日公布されたことは周知のことである。しかしながら、解散前の第15国会への上程の段階においても法制定の発案から上程まではほんの数ヶ月しかなかったことは驚きに値する。

現実には、東京で開催の定例の全国知事会後、長崎、島根、鹿児島、新潟、東京の5都県知事が集まって5知事連名による「離島振興法（仮称）制定のための趣意書」を作成したのが昭和28年1月14日。島根県が作成の離島振興法（仮称）要綱案（第1次案）を5都県企画室長等で検討されたのが同月下旬。翌2月4日には要綱の第2次案が、2月9日には要綱ではなく離島振興法案（第4次案）として検討案が作成された。立ち上がりから1ヶ月も経っていなかった。そして同月20日には衆議院法制局で離島振興法案の第1回読会が開始され、同月26日には当時の与党であった自由党政調会で審議を開始、翌3月12日には同総務会を通過し、同13日に国会上程となったのである。

この間、すなわち離島振興法案（原案）作成から国会上程までもわずか1ヶ月ほどの超スピード審議であった。今日のように事務処理等にOA機器が導入されていたわけでもなく、見本となるような地域振興のための法律があった訳でもない環境下の出来事である。

我々が今日、当時の凄まじいばかりの精力的な

法制定運動を知ることができるのも「記録」があったからである。当時を知る記録は主に3点ある。第1点は、全国離島振興協議会発行の機関誌『しま』創刊号（昭和28年12月1日発行）において松本光之氏が寄稿した「離島振興法制定の経緯概況報告」、第2点目は、同機関誌第36号—離島振興十周年記念号—（昭和38年12月15日発行）に寄稿された多くの離島関係者の「思い出」記事。そして第3点目は、一般には公表されていないが、竹下虎之助元島根県企画室長主査（後の広島県知事）が当時の作成資料をとりまとめておいた、いわゆる「竹下文書」である。

我々はこの3点の資料により、離島振興法の制定の経緯をかなり詳細に知ることができる。さらには法制定当時の様子を窺い知ることのできる既述の資料以外では、全国離島振興協議会が平成2年3月に開催した座談会の記録がある。それは離島振興法制定30周年の記念事業の一環として同協議会が編纂した記念誌『離島振興30年史 上・下巻』の刊行が一段落した後の平成3年、離島振興法制定運動に直接関わられた4人の方々が当時を回想された座談会で、その記録は「離島振興法の制定を回想して—群像の足跡と21世紀への展望—」（A5版、21頁、平成3年5月、全国離島振興協議会）として離島関係市町村等に配布された。以上がおおむね公表されているものといえよう。

\*座談会出席者：倉成正（長崎県企画室次長、後の衆議院議員）、竹下虎之助（島根県企画室主査、後の広島県知事）、松本光之（長崎県企画室主査）、山階芳正（全離島幹事、防衛大学校教授）、司会：児玉義幸元（国土庁離島振興課長、日本離島センター専務理事）

しかしながら、これら資料では知ることのできない部分、すなわち「現実」については別の資料を見出すしかない。「現実」については、事柄に

\* Received February 23, 2006

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 地域づくり学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

対する認識の違いがあることや関係者への配慮などから活字にされることが稀で、それを知るためには当事者から改めて聞き出すしかないと思われる。それでも影の部分というか触れられて欲しくないと思われる部分に関しては、なかなか発言してもらえず、その前後の発言の様子から推察するしかなく事実の確認が難しいのが現状である。

社会学者の中野卓氏（東京教育大学教授）は、ライフヒストリー、すなわち「個人史」研究にかなりの力を注いだ研究者の一人である。彼の著書『離島トカラに生きた男・第一部』（1981年、御茶の水書房）のあとがき（＝第一部のおわりに）で、くオーラル・ライフ・ヒストリーは、調査者に対して話者が話して下さった時点でその話者の生活史が想起され語られたものであるから、それ自身が既に資料という性格をもつものである。と述べているが、中野氏の考えを拡大して解釈するならば、「聞き取り」そのものも既に資料として扱うことが可能ではないかと考える。

民俗学者・宮本常一氏は、『忘れられた日本人』（1960年、未来社）、の中の「名倉談義」では三つの部落の年寄りの座談会の様子が再現されているし（50～69頁）、同書中の「土佐源氏」は目くらの博労の語る一生を聞き書きとして見事に記録されている。また同書の「女の世間」では84歳の老女の話をもそのままに再現している。中国新聞社の記者である佐田尾信作氏は彼の著『宮本常一という世界』（2004年、みずのわ出版）でインタビューの内容をそのままに記している。こうした著述は小説家、研究者の間でもかなり使用されている。

#### 竹下氏、離島振興法制定運動前夜を語る

前述のとおり、離島振興については、不明確の部分が多からずあるが、以下は、法制定運動時における事務方の中心的存在であった竹下氏に筆者が伺った実話である。これによって幾ばくなくとも影の部分を公にすることで今後の離島振興法の実体解明の資料となることを願う者である。なお、発言内容は竹下氏に確認し公表を許可いただいていることを添える。

なお、この他、島根県で竹下氏の上司であった東梅良太郎氏が和泉一雄氏（＝経済企画庁離島振興課の初代課長）へ送った書翰などこれまで公開されていない幾ばくの資料があるが、それらについては追って公開したいと思っている。

竹下氏へのインタビューは、2005年3月28日

（月）午前10時から同11時、広島市「広島県社会福祉会館」2階理事長室においておこなった。

#### 導入

**鈴木：**ところで、離島振興の歴史を改めて整理しているのですが、いくつか判らない部分があり、今となってはその当時をご存じの方は事実上竹下知事以外おられないので、些細なことではありますがお教えいただきたいことがあり伺わせていただきました。

**竹下：**いや、もうすっかり昔話ですから忘れちゃって、もう記憶に残ってませんよ。

**鈴木：**つい先だって松江に行った際、田黒（輝夫）さんからおもしろい話を聞きました。知事は島根県庁に入って、企画課へ行く前は秘書課にいたんだそうですね。それは別として、「隠岐島の開発計画、あれは竹下さんが独断でやったんだよ。」と田黒さんは言っていました。「どういうことですか。」と聞くと、田黒さんが言うのには、「いつの間にか俺の引き出しに原稿が入っているんだよな。」と。田黒さん、当時の浜見さんはいつもガリ切りをやらされていたそうですね。（\*田黒輝夫：島根県企画室主事、その後隠岐汽船社長）

当時の竹下主査は、口では何も言わない、ただ黙って原稿をおいて行く。そうすると田黒氏は「ハハーン、これをやっておけと言うんだな」と思い、それをガリ切りして、また黙った戻しておくということを随分やりました。」という話をしみじみと話してくれました。

**竹下：**そうでしたか。忘れてしまったな。

**鈴木：**この書類（『企画室の業務概要』昭和29年1月、島根県、ガリ版刷りB5判、41頁）ができたのはご存じなかったですか。

**竹下：**知らない。私が出てからですかね。29年か、（書類を見ながら）そのころは中小企業課長をやっていたのか。

**鈴木：**そうですね。この後ろの方に書いてありましたね。ここにあるメモは、これ知事の字ではないですか。これが昭和28年の11月頃ですね。ここに書いてある浜見さんが。

**竹下：**浜見君は知っている…（知事しばらく無言）

#### 隠岐島の開発計画づくり

**鈴木：**実は、今日、是非知事にお教えいただきたいことが大きく二つありまして、一つは、なぜ知事は隠岐島の開発計画をこんなに熱心に取り組まれたのかということで…。

**竹下：**あれはね、僕がはじめて隠岐島へ行った時は、隠岐の災害があった時ですよ。何年頃だったかな、22年5月に地方課に入りましてね。その前は地方課でアルバイトしてましたけど。京大を卒業する前にアルバイトで行ってたんだ。学問するにも食っていけないから、身体こわしたし。昭和20年に（戦争に）負けたんで21年の2月の末頃に、鹿児島に上陸して帰ってきて、復員して。

**鈴木：**知事はどちらだったんですか。

**竹下：**台湾。それで京都の知り合いに連絡を取ってみたら4月から出てこいというので、まあ3月中ぐらいは休憩して、4月に学校に行ってみたけれども、京都では食っていけないんですよ。寝泊まりする下宿はあったけど、潜り込むだけで大学食堂もつまらんし、身体こわしちゃってね。大学病院へ行ったら肺浸潤になっていて、そのままにしておくと肺結核になり、手術して背骨の2、3本切らなければいけないと。家へ帰って米食べて栄養失調を治さんと。京都じゃ身体がもうだめだ、もう帰れっていうんだ。

生まれて初めてレントゲン撮って、今でも残っているんだ、ここに。ハイモンリンパ腺というの。レントゲンを撮ると必ず痕が影がでるんだ。それで（松江に）帰ってきたら、島根県庁で来いという。それで県庁に入ってアルバイトをやって、月給もらって。でも時々には京都に行ったりして高文の試験を受けた。そうしたら試験通っちゃってね。行政官の制度がなくなる最後の行政官の高等文官の試験だった。それで22年9月に京都大学法学部卒業と同時に任官させてもらった。

島根県の事務吏員、主事になったのが9月だったけど、その頃にちょうど高文の試験の合格通知が来てね。地方課が喜んでくれてね。東京へ口頭試問を受けに行く旅費などは地方課で算段してくれるし、「（東京へ）行ってどうしても口頭試問にも合格してくれって」頼まれちゃってね。

（口頭試問も合格したら）京都大学の先生が大蔵省へ入れだの何とか省に入れだの云々。でも京都の下宿を払って新しく東京で下宿を探して就職するなんて、とっても不可能だろうと思ってね。身体も今のようになに自信がない時だったから県庁に残ったんだ。卒業すると大蔵省を受けるとか通産省の、当時は商工省って言ってたけどそこを受けるとかあったけど受験を留めて島根県庁に残ったんだ。

## 竹下氏の隠岐島との係わり

**竹下：**県庁では企画部門の仕事をやり始めたが、そこに東梅さんという人がいて、昭和24、5年に（災害のことで）隠岐島へ行くことになった。その時に僕は視察といっても農業のこととか農業土木とか災害復旧制度とかはわかる訳じゃないけれどね。現場を見て歩いて、隠岐支庁の支庁長とか課長から事情を聴いて、どうしりゃいいんだいと。

結局、現在の災害復旧制度というのは至れり尽せりではあるけど、残念ながら隠岐島には適用ができないということ、それは一団地の面積が猫の額ぐらいに小さくて、その農地が何アールとかまとまったところでないと農地の災害復旧というのはできないというんだ。

**鈴木：**採択基準の問題ですね。

**竹下：**そう、採択基準が一つと、それからもう一つは補助率。当時は2分の1だったかな。しかし後の2分の1は役場が持つわけだけでも役場にはその能力がない。半分は災害復旧で国が手伝ってくれるけど、半分は自前でやらなければいけないが負担できないというんだよ。

災害復旧では、井戸掘るとかため池を作るとか、国の制度が災害を含めて農地、今でいうと土地改良ですね。それをやりたいが（支庁では）「この災害復旧に制度はできているけど、隠岐島には無理なんです。」というんです。

そりゃいかなんという事で、県庁に帰って棚から法令集を出して、法律から昔の耕地整理法から土地改良法ができる前の古い農林省の法律とか、いろいろ通達とかまで読んでみたら、なる程その通りなんだ。それで県耕地課の技術の職員にいろいろ教えてもらったりして、抜け道なんかも聞いたけど、結局だめなんだな。不便な、恵まれない地域の、要するに災害復旧に関しては法律は出来てはおるけれど、国庫補助率と採択基準の二つのために零細な農業者なり農民には恩典はないということがわかったんだ、法律ではね。

それで何とかするためには各種法律の特例法を作れないだろうか。この隠岐島みたいな離島とか一人当たりの耕地面積の少ないところについて基準を作っちゃって、現在の採択基準をはるかに半分とか4分の1採択基準にしてくれるというための特例法と、それからもう一つは、国庫補助が2分の1じゃ持てないから、その裏負担というか自己負担を高率補助することによって助けてもらうというか、虫がいいけどこの2つをやるためにはやっぱり法律でないとね。まあ、そういったこ

とが一番最初のこと、隠岐島視察第1号ですね。

**鈴木：**知事が最初に隠岐に行ったのはアルバイトをやっていたときですか。

**竹下：**いや、アルバイトではなく、島根県の吏員になっていた。早魃の災害の視察に東梅さんが行く時に、「君、行かんかい」と。はじめて隠岐汽船の夜行というものに乗って行った覚えがあるんだ。

**鈴木：**その当時はかなり時間がかかったでしょうね。

**竹下：**夜の8時頃に境港を出て、朝6時頃に浦郷経由で西郷に着くと。その時「隠岐丸」の事務長は浜見の親父がやっていたんだよ。

**鈴木：**それで田黒さん、旧姓の浜見さんは、その後隠岐汽船の社長をやられたのですね。

**竹下：**浜見の親父が事務長を…。でもそれは後で知ったことだけだね。

**鈴木：**そうですか。実は一番知りたかったのは、島根県が国総法に基づいて特定地域の開発、あれを国が募集した時に、大山出雲を候補地に出されたのと同時に隠岐島も申請するという話があったようですね。

**竹下：**ありましたね。

**鈴木：**それで、特定地域の開発は国総法に基づいた計画なので、規模から見ても大山出雲は多少わかるけど、なぜ隠岐島が入ったのですか。これが災害復旧で、干ばつで、今知事が言われたように災害復旧でやるのであれば、当時の状況から見て、採択基準やその他もあるし、一方の特定地域というのは、もっともっと、例えば食糧増産だとか電源開発だとか。何で隠岐島が申請書類に入ったのですか。そこが解らなかつたんです。これ、誰の発案だったんですか。

**竹下：**それは、当時の県会議員に中川秀正という理論家がおってね。面白い人で、僕はとっても仲良しだったけどね。やっぱりこの人の政治力じゃないかと思うんですね。大山出雲なんていうのは、(島根と鳥取の)両県にまたがる。それだったら隠岐島は両県またがるんじゃないのと。しかし、まあ総合開発地域になってみたところで隠岐島なんかは恩典なんかないやな。3種や4種の漁港とか港湾というのは浦郷と西郷だけだしね。港も、あとは皆小っこい港や漁港ばかりだから、とても特定地域の総合開発などの恩典を受けるような、適用を受けるような農地もなければ漁港もないね。実質、恩典はなかったと同じではないですか。

**鈴木：**当時、中川先生は衆議院議員になっていま

したか。

**竹下：**いや、まだ衆議院議員ではなく県会議員で大ボス。中川秀正っていうのは、その後議長もやって、大橋武夫の派だった。

**鈴木：**あとで大橋武夫先生のことについても教えていただきたいと思っているのですが、中川先生が、これ公約みたいな形で何か言い出したということではないんですか。

**竹下：**いや、中川秀正っていうのは、三百代言と悪口言われるくらい法律に詳しいんだ。法律が好きでね。よく読んじゃうんだよ、無味乾燥な法律を。何法何法ってね。よく知ってたんだ。三百、三百というんだ。だから三百代言なんだよ。それで各種法律のニュースとか新聞記事をよう読んで知ってるんだ。

それで担当の課長なんか呼んでね。こうこうだけど、これはどういうことだとか、その資料を俺にもくれよとか、よく勉強するんだ。隠岐出身で、松江に家を借りちゃって、通勤できないから。ここに泊まり込んでいるんじゃないから。酒飲む訳じゃないし暇だから。彼の下宿というか、すでに家で、別宅でお酒飲む訳じゃないしね。その暇つぶしにテレビもない時代だから勉強しとったよ。中川さって面白い人だよ。囲碁くらいやったかもしれないけどね。

**鈴木：**それで結局、竹下知事は、当時開発計画を所管するようになって…。

**竹下：**僕が大山出雲の開発計画で覚えているのはね。担当は、その時は総合開発計画というのはやったことはないけれど、<sup>ひいかわ</sup>斐伊川上流に<sup>みなり</sup>三成発電所という島根県営の第一号の発電所を作ったということなんでね。それから松江から玉造温泉へ行く代行干拓をやっておってね。その中へ国道の付け替えの9号線を入れちゃったんだ、干拓地の中にバイパスを。今、きれいに松の木が植えられているけど、穴道湖畔のこの松江から玉造温泉の国道9号線の中でね。あれを干拓地へ造っちゃった。それぐらいが大山出雲の記憶に残っているものかな、アハハ。

**鈴木：**そうですか。ところで知事は隠岐島の開発計画を作るに当たって、一番の指導者というか相談相手、これはどなたかいたのですか。

**竹下：**いや、別段。でも詳しく、こうせいとかあせいとかいってくれたのは、結局企画室長の東梅良太郎さんかな。東梅さんは隠岐支庁長をやったことがあるのかな。農政課長やって、京大の農業経済の出身だったんで。それから松本さんの、

亡くなった松本さんの先輩だろうと思うよ。

**鈴木：**竹下知事は、開発計画を今まで経験した勉強したということはないのですか。

**竹下：**ないですね。

**鈴木：**手探りですか。その当時、隠岐支庁には勝部さんがおったでしょう。

**竹下：**経済課長でね。

**鈴木：**彼などはかなりいろいろと助言をしてくれたとか…。

**竹下：**そりゃ、隠岐島へ出張したりした時は、耕地のことだとか何だとか、いわゆる農地のことだとか経済なんか、勝部さんがいつも教えてくれるんだよ。あれは先生なんだよ、僕にとっては。

**鈴木：**大変失礼ながら、今まで計画作り、あまり経験がないのにやられて、大変すばらしい離島振興の基になる案まで作られていますね。

**竹下：**そりゃ僕も、元は法学部出身だからね。農地の制度や何か知らんでも行政法の範囲内のことだから。誰もやらないから東梅さんと作っちゃって。倉成さんが喜んでね、長崎訪問の時それ見せたら。うん。

#### 長崎県知事の「親書」

**鈴木：**もう一つ伺いたのは、倉成さんのことはもちろん当時、知らなかったわけですね。

**竹下：**知らなかったね。

**鈴木：**一つは、先の座談会の時に、長崎県から「親書」が来たと、それを受けて東梅さんが…。

**竹下：**良太郎氏が、長崎と連絡を取って…

**鈴木：**即、行ったようですね。

**竹下：**うん、東梅氏がね。その、今検討している要綱案を持って、こういう離島振興法という名前ではなく、離島開発法と僕は書いたはずで。

**鈴木：**そうですね。

**竹下：**離島開発法っていうのを作らんと。対馬だって壱岐だって五島列島だって、法律、制度は土地改良関係、災害復旧関係、この他農道まであるけれど、恐らく農地面積、一団地の規模は少なくてね。適用はできないはずだから「こういうものを作らないと島はだめですよ。」っていうのに絞っていった方がいいんじゃないか。こっちもそれで行こうじゃないかというんで、東梅氏と相談して、僕がたたき台を作ったんだよ。それを持って長崎県に「こういう案ではいかがかというのを説明してこいや。」ということで長崎に行ったんですよ。

ちょっと脱線だけどね。永井隆さんが、原爆の、

長崎医大の永井先生が僕の先輩なんだよ、松江高校の。それでこの息子さん、娘さんと一緒に、如己堂横になっちゃってね。もう死ぬ間際だったんだ。何年か、あと一年持つか持たんかって言う頃だろうから、永井さんの見舞いに行っておいてこうこうと話をしてから引き上げて、それから県庁に寄って、今の仕事の話をして、その晩の夜行か何かで下関か門司まで帰ってきた筈ですよ。だから日帰りみたいなもんだよ。

**鈴木：**当時は、連絡というのは電報ですか。例えば、

**竹下：**電報だ。

**鈴木：**長崎から親書が…

**竹下：**それは手紙

**鈴木：**それはどういう内容だったのですか、その親書はどこかにないでしょうかね。

**竹下：**ないだろうな。一回、東梅氏が持っているのを読んだだけで、その当時はコピーをとるなんていうこともできなかったしね。コピーなんてなかったしね。

**鈴木：**もしその手紙があるとしたら、島根県の公文書館あたりですか。

**竹下：**ない。東梅氏個人のあれだからね。

**鈴木：**そうすると東梅さんのところの、ご遺族を訪ねたらあるかもしれないと。

**竹下：**さあ、どうかね。ウーン。

**鈴木：**その親書は、島根県だけではなくて鹿児島県だとか東京にも行ったのですか、それとも…

**竹下：**そいつは知らない。

**鈴木：**その後の「趣意書」は、もちろん別ですよ。あの5県の知事が名前を連ねた離島振興法を作るという例の趣意書は。これはもっと後の話です。それで、その「親書」と言うのは、何が書かれていたのか知りたいですが。

**竹下：**手紙ですよ。要するに、長崎県の方としては島根県でも離島問題について勉強しておって、いろいろ災害も多いし、隠岐島も困っておるので、その島根県の企画室でいろいろ総合的に取り組んでおられるそうだけれども、長崎も全国一の離島を抱えた県だから、同じような趣旨で何とかやらないといかんと思っているので、連絡を取りながら今度一つお互いに教えたり、教えられたりしましょうや、というような程度のことだった。だから離島振興法を作るといったようなものだから、特別法を作らんとどうにもならんといったところまで言っていないんだ。

**鈴木：**一般的に考えますと、離島をたくさん持つ

ているという、島根県よりまず鹿児島県を考えますよね。あるいは東京都ですとか。即反応したのが島根県であったと取ってもいいですか。

**竹下：**他の県に出掛けていって云々って言うのは島のことで、東京都とか新潟県とか鹿児島県とかやったことはないですよ。

**鈴木：**松本さんの、座談会の記録を見ますと、毛筆で書いたと松本さん言ってるんですね。

**竹下：**ウーン、だから私信だったんだよ。

**鈴木：**そうですか。で、話は少しずれますが、島根県から長崎へ行く時、当時は列車は、どうやっていったんですか。

**竹下：**山陰線でね。京都発の下関行きというのが一日に1本か2本あったんだよ。下関で乗り換えて、船に乗り換えて向こうへ渡って、それで…。

**鈴木：**岡山の方へ出て行く伯備線はなかったんですか。

**竹下：**イヤイヤ、そんな伯備線なんて全然使ったことないよ。松江から下関へ出てきて夜行列車で何時間かかったか忘れちゃったけど。

#### 法案作成の功績者・大橋先生

**鈴木：**今まではっきりしてなかった部分が大分判ってきました。それからもう一つお教えいただけますか。もし大橋武夫先生がいなかったら、離島振興法はできなかったんですか。

**竹下：**いや、そんなことはない。

**鈴木：**でも知事はこの座談会（全離島主催「離島振興回想座談会」）の中で、とにかく法案作りは大橋先生が衆議院議員になったばかりの時、何か功績というんですか、第一の仕事をやりたいし、こういうこともあって自らどんどん法案を作って法制局に持ち込んで、大橋が見たということで、と述べられていますが、たかだか1ヶ月、2ヶ月でもって法案を上程できるなんて、通常じゃ考えられない気がするのですが。

**竹下：**うん、それは事実。その大橋さんがまだそれ程偉くなかったからね。そりゃ佐藤栄作や池田勇人は同期の桜だけど、当選1回で大臣になっているから。それと比べたら大橋武夫なんていうのは建設省出身で、まだ大臣何かしてもらう順番じゃなかった訳よ。それでヒラでいたから遊んでいたんだよ。そこへ僕らが東梅氏と（法案要綱を）持っていくから喜んじちゃって、ダーとやっちゃうわけだ。

**鈴木：**そうすると、その基本的な考え方は竹下知事が作られたその要綱、これを踏まえて…

**竹下：**そうそう。むしろ法案に落としてね。そういったものでどうだろうかねと。勿論議員提案でないといけなだろうし、その当時、積雪寒冷単作地帯の法律っていうのあったよね。

**鈴木：**ありましたね。

**竹下：**あれが先にできているんだろうと思うが、あれ式でやろうと思ったけれど、高率補助とかね、しかし農林省の作った法律ではやはり同じことで、採択基準を下げないとか、地方負担、国庫負担率を上げないという法律だから、役に立たんわけよ。積雪寒冷地帯とか急傾斜地帯とかと同じ法律では。農林省版の法律じゃ浮かばれない。それじゃダメというので、特別法というので今の離島振興法っていうのができたんで。そういう考え方も持っていたんじゃないかな。

**鈴木：**そうすると、高率国庫補助の提案は竹下知事が強く…。

**竹下：**それだけじゃなくて、僕は隠岐島へ行ってみて考えてみたら、高率補助にしてせにゃいかんと言うことになった。高率補助にせいって言うのは、個人負担が島民には出来ないからですよ。

**鈴木：**その時にですね。通常ですと高率国庫補助という、例えば2/3とか3/4とか、全額と言うことはあまりないかと…。

**竹下：**そりゃ無理だ。

**鈴木：**でも、これ、結果的には全額ですよ。港湾、漁港、その後の空港もそうですけれども。

**竹下：**それはなかなか、大蔵省とも、なかなかね。法律では補助率、そこら法制局よりもむしろ大蔵省主計局…、

**鈴木：**知事の発想は、その当時は高率というのは出来たら基幹的なものは、全額を…

**竹下：**全額というのは無理だろうと…

**鈴木：**全額にしたのはどなただったんですか。

**竹下：**イヤー、全額っていうのは無理だよな。

**鈴木：**大橋先生ですか。

**竹下：**うーん、強いて言えば大橋さんが持ち込んだという格好でしょうね。

**鈴木：**でも、よく通りましたね。

**竹下：**うーん、綱島正興さんが弁護士でね、長崎にね。それから鹿児島は山中貞則さんが一応若手で、なかなか手八丁、口八丁でね。いろいろおもしろい方で、よくやってくれるし、それから島根は大橋武夫さんがいるし、なかなか関係のついておった国会議員さん方がよくやってくれたんじゃないですか。当時、まだあまり皆偉くなかったから、時間的な余裕があったんじゃないかな。

### 町村長の参加

鈴木：それからもう一つ、いわゆる吉田総理によるバカヤロー解散。

竹下：あったね。

鈴木：あの解散がもしなかったら、3月ですんなり法律が通っちゃったでしょうね。もし通っていたら、その後の全国離島振興協議会、これ出来ていなかったでしょうね。

竹下：どうか知らん、判らんな。

鈴木：知事の、いわゆる「竹下文書」、あれは6月に総決起大会、これを招集して大々的にやられているわけですが、もし解散していなければ、法律が通っていれば、市長村長が出てくる幕がなかったですね。

竹下：ああ、そうかね。

鈴木：そうすると、法律は随分変わった形になってたのかなと思うのですが、そこいらはどなたも触れてないもんですから。

竹下：うーん。

鈴木：ですから、結果的に解散して良かったという風にとっても良かったのかなと。

竹下：うーん、記憶ないね。そこいらは判らない。

### 離島振興対策協議会

鈴木：それから、肝心要の5県の知事が集まって離島振興対策協議会という組織が作られているんですが、この組織の名前は誰の発案ですか。竹下知事ですか。

竹下：イヤー、別段。その頃は僕の仕事の方がもう替わって…

鈴木：この時は28年の1月ですよ。1月の14日ですから。

竹下：それだったら、僕はまだ。それは東梅さんか何かが考えた名前かも知れませんよ。島根県が発議しておれば。

鈴木：これは松本さんに聞こうと思っても、倉成さんに聞こうと思っても、もう亡くなってしまうもんですから、こればかりは判らなく。これは、この名前は誰が付けたのかなと。

竹下：東梅さんじゃないのかな、間違いないと思いますがね。

鈴木：そうですね

竹下：非常に立派な、温厚な良い人だったから、東梅さんっていう方は。

(知事は、島根県「企画室の業務概要」をパラパラ見ている。)

鈴木：それは浜見さんからお借りして、コピー取

って、当時の新聞切り抜きは県図書館で…

竹下：28年2月1日、民生部長さんから企画室長になってますね。東梅良太郎さん。

鈴木：肝心なもの、もう一つ教えてください。桜内義雄先生は、竹下知事とは何か関係はございますか。

竹下：いや、別段。

鈴木：桜内先生も大橋先生と一緒に…、

竹下：いや、もう桜内先生の方がずっと先輩だから、もうよくやってくれて。桜内先生というのは、隠岐島とか島根半島とかいうのが最大の地盤でね。隠岐島っていうのは桜内先生のお膝元になるわけだ。だから市長村長もその後も桜内派の方で、大橋じゃないんだ。中川秀正が一生懸命、この大橋、大橋ってやり始めた頃だったから、桜内さんの方の先代からのやっぱり、あれっていうのは郡民とか島民とか、町村長さんには桜内さんの方が浸透しているんだよね、お父さんの。

鈴木：桜内先生も昨年ですかね、亡くなられたのは。

竹下：そうだね。

\*この後は、竹島の話になり、「島根県竹島の研究」を執筆された田村清三郎氏の思い出が竹下知事から話されるが、ここでは割愛する。

以上が筆者が竹下氏を訪ねて伺った離島振興に関わる部分の内容である。しかし、こうしたインタビュー記録は、かなりの程度裏付けとなる「何か」をもたないと公表したとしても資料的価値が喪失してしまう恐れがある。前段でも触れたように、民俗学者、社会学者、小説家等は「話者」の承諾のもとにその語られた内容を公表し、多分に学問的価値をも見いだされている。筆者の場合裏付けとなる「何か」は、既に本稿で紹介した各種離島振興法制定に関する文献、並びに竹下氏を知る島根県の関係者の助言とした。今後、こうした手法について更に精度を上げより高度な資料に位置づけられるようにしたいと思っている。